

中国を見て・感じて・探る…大連事務所発のレポート

大連のニュースチャンネル「大連頻道」での報道

キャノン大連 新しい工場を設立

キャノン大連事務機有限公司が近々、正式に新しい工場を設立する。この工場では、世界でも最先端のカラーフィルム(プリンターカートリッジ)生産設備を取り入れている。工場の面積は約3万平方メートル占め、建築面積は4万平方メートルで、来年の6月に工事が完成する予定だ。開発区管理委員会は今回のプロジェクトを重要視し、工事を日程どおりに進めていくと保証した。

11/6 大連市対外貿易経済局作成のホームページでは、下記のように掲載されている。

「キャノンは大連に早く進出した規模の大きな企業。20年間、自社の発展だけでなく大連市の教育事業、外資企業の進出、社会事業の発展に貢献してきた。昨年の世界金融危機で多くの企業が打撃を受けたが、キャノンは社員を解雇することも賃金カットすることもせず、困難な時期を克服する努力を続けた。これは、社会に責任を持つ大企業の風格を具体化したと思える。今回の新工場の着工は、キャノンが金融危機の影響を徐々に克服し、大連と中国の経済発展を信じたことを表している。大連市政府は、大連の発展のためキャノンの支援を惜しまず、歴史的なできごとである国家戦略の遼寧沿海経済地帯の開放開発計画を、ともに手を携えて発展していきたいと望んでいる」これは、張軍・副市長は、キャノンの三橋会長との会見での発言を要約したもの。

キャノン大連の新工場建設に関する記事が様々に報道されている。大連市にとってキャノンは、日系企業の中でも特別な存在で、この企業が新規の投資をしたことは意義深いものだにとらえている。

リーマンショック以来、大連においても日系企業の打撃は大きく、工場の稼働率が激減し、リストラ、一時帰休など様々な手段で会社・工場の維持を図っていた。

このような危機的な状況の中で、なんとか雇用を確保するため、市政府が各社の責任者を集めて、中国人労働者の継続的な雇用を依頼するという異例な事態も起こった。

さらには、一番高い人件費となる日本人駐在員も減少。また、新型インフルエンザもあって日本人出張者も激減し、大連開発区にある有名な日本料理店が閉店してしまったほど大連の日本人相手のビジネスが不況に飲み込まれた。

大連に立地した日系企業は、大きく2種類に分けられる。一つは、安い労働力を使って製品を作り、日本・欧米に輸出する輸出専用型工場。もう一つは、中国国内市場用と輸出用の両方を作る国内戦略型工場。

内需が拡大する中国市場をメインターゲットにした国内戦略型工場は、最近、経済危機を克服し、生産がピークの状態に戻っている工場も少なくない。今回のキャノンのように、新規投資を行う企業もこれから増えてくることも十分考えられる。

安川電機もその一つで、来春、瀋陽に新工場をオープンさせる。これは今ある上海の工場だけでは中国国内のモーターの需要に対応しきれず、中国北部の第2の拠点として瀋陽に工場新設した。中国東北地方だけでなく、北京、天津なども含めた中国の北部エリアの需要をカバーする工場と聞いている。

これからの中国進出は、コスト優先の進出はもう考えられないようだ。中国市場でどれだけの販売が見込めるかが大きなファクターであり、中国国内の販売先や物流コストなどがどの都市に立地するかを決める上でのポイントとなってくる。

古くから、日本への輸出用工場の誘致に成功してきた大連市、日本に近いことがおおきな理由であった。しかし、今は、その長所が短所となり、中国大陸の先端で、人件費が高い街という位置に変わってしまった感があるのは否めない。今後の、大連市の企業誘致戦略をどう変えていくのかが注目される。